

ODIP 4.3 リリースノート

2022/09/01

(株) インテリジェント・モデル

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

## 目 次

A. 変更内容 .....	4
1. Web API の拡張 .....	4
(1) 設定ファイルのオプション追加 .....	4
(2) リクエストパラメーターの追加 .....	4
(3) 実行例 .....	5
2. HiRDB サポートの追加 .....	6
(1) JDBC ドライバ .....	7
(2) コマンド実行 .....	7
(3) RD エリアの指定 .....	8
(4) RD エリアのページサイズ .....	8
(5) 制限事項 .....	8
3. IN 演算子の追加 .....	8
(1) 構文 .....	8
(2) 定義例 .....	9
4. GUI の改定 .....	9
(1) データタイプ、属性、データセット各タブの表示切替機能 .....	9
(2) 定義要素の変更表示 .....	10
(3) 「名前の変更」及び「削除」機能の配置変更 .....	11
(4) 定義ウィンドウの改定 .....	11
(5) リスト表示の改定 .....	13
(6) 全参照の改定 .....	14
5. その他の修正 .....	14
(1) ODIP アドミニストレータの改定 .....	14
(2) ODIP オペレーションマネージャの改定 .....	16
(3) ODIP リポジトリマネージャの改定 .....	17
(4) ODIP プロセスマネージャの改定 .....	17
(5) ODIP トランスフォーマの改定 .....	17
B. バージョンアップによる影響 .....	19
1. 定義内容・検査に関する影響 .....	19
2. 処理実行結果に関する影響 .....	19

## A. 変更内容

### 1. Web API の拡張

Web API 経由で実行したプロセスの出力データを Web API のレスポンスとして受け取る機能を追加しました。出力データは JSON 形式で返ります。この機能は、処理モードが「標準」の管理単位でのみ実行できます。処理の出力対象行をレスポンスとして返すとき、データベース/ファイルには出力しないため、出力データセットのデータソースや、ユーザビューのロードタイプ（再作成、全置換、行追加など）の指定は無効です。

#### (1) 設定ファイルのオプション追加

設定ファイル (odip.ini) に、次の Web API に関するオプションが追加になりました。

Web API に関連する主な追加オプション

オプション	説明
server.webapi.job.output.type.default=[datasource response]  (既定値：datasource)	Web API で実行したジョブの出力先をデータソースの指定に従うか、レスポンスとして返すかの既定値を指定します。この指定は、ジョブ実行リクエストの "outputType" で動的に変更することができます。
server.webapi.job.output.json.keyname.type=[physical logical]  (既定値：physical)	Web API で実行したジョブの結果をレスポンスで受け取るとき、JSON データのキーにデータセット名/属性名の論理名か、テーブル・ファイル名/カラム名の物理名のどちらを使うかを指定します。

#### (2) リクエストパラメーターの追加

Web API のリクエストの追加パラメーター

オプション	説明
outputType=[datasource response]	Web API で実行したジョブの出力先をデータソースの指定に従うか、レスポンスとして返すかを指定します。指定がない場合、設定ファイル (odip.ini) の server.webapi.job.output.type.default に従います。response を指定した場合の出力データはキー名 "data" で返ります。
maxRows=整数 (既定値：無制限)	結果として返す最大行数を指定します。複数のユーザビューが定義されている場合、それぞれの最大行数になります。

## (3) 実行例

リクエストの JSON 例

```

{
  "rn": "odip_001",
  "processid": "01010100010101",
  "base_date": "20210222",
  "verbose": false,
  "instanceName": "myjob1",
  "outputType": "response",
  "maxRows": 2
}

```

```

{
  "data": {
    "OUTPUTTABLE001": [
      {
        "BASE_DATE": "20210222",
        "URIBA_CD": "10101",
        "TANPIN_CD": "AF00101",
        "TANPIN_MEI": "フォーマルスーツ(ビュアブラック)",
        "HYOUJUN_TANKA": "14800",
        "URIAGE_KINGAKU_KEI": "296000",
        "URIAGE_SYOUHIZEI": "14800",
        "URIAGE_KINGAKU_KEI10": "200"
      },
      {
        "BASE_DATE": "20210222",
        "URIBA_CD": "10101",
        "TANPIN_CD": "AJ00301",
        "TANPIN_MEI": "ジャケット",
        "HYOUJUN_TANKA": "8900",
        "URIAGE_KINGAKU_KEI": "118000",
        "URIAGE_SYOUHIZEI": "5900",
        "URIAGE_KINGAKU_KEI10": "200"
      }
    ]
  },
  "returnCode": 0,
  "startTime": "2022-01-20 18:32:42",
  "endTime": "2022-01-20 18:32:43",
  "elapsedTime": "0.294 (sec)"
}

```

複数のユーザビューが定義されている場合は次のようになります。

```
{
  "data": {
    "テーブル/ファイル 1": [{
      "カラム 1": "20220301",
      "カラム 2": 1
    }, {
      "カラム 1": "20220301",
      "カラム 2": 2
    }],
    "テーブル/ファイル 2": [{
      "カラム 1": "20220301",
      "カラム 2": 1
    }, {
      "カラム 1": "20220301",
      "カラム 2": 2
    }]
  },
  "returnCode": 0,
  "startTime": "2022-01-20 18:32:42",
  "endTime": "2022-01-20 18:32:43",
  "elapsedTime": "0.294 (sec)"
}
```

## 2. HiRDB サポートの追加

データソース情報の DBMS 名に「HiRDB」が追加され、処理の入出力データベース、およびトランスフォーマリポジトリに HiRDB を使用できるようになりました。

JDBC ドライバの URL は、既定では次の形式になっています。HiRDB のクライアント環境定義ファイル(HiRDB.ini)は、ODIP アドミニストレータ、ODIP オペレーションマネージャ、ODIP リポジトリ/プロセスマネージャ、ODIP トランスフォーマの config フォルダ配下にそれぞれ格納されています。

```
jdbc:hitachi:hirdb://DBID=<port>,DBHOST=<host>,HiRDB_INI=./config,UAPNAME=ODIP
```



No.	項目	説明
1	データソース名	任意のデータソース名になります。
2	DBMS 名	HiRDB を使用する場合は「HiRDB」を選択します。
3	ポート番号	HiRDB システム定義ファイル pdsys の pd_name_port の値を指定します。 デフォルトのポート番号は 22200 です。
4	データベース名	DBMS 名に「HiRDB」を選択した場合、データベース名の指定はできません。
5	ユーザ	HiRDB へ接続するユーザ ID を指定してください。 指定したユーザ ID は、デフォルトのスキーマ名として使用され、ODIP が実行する SQL でのテーブル名は"ユーザ ID.テーブル名"のように修飾されます。 (スキーマの指定がデータセットにあれば、"スキーマ名.テーブル名")
6	パスワード	HiRDB へ接続するユーザのパスワードを指定してください。

#### (1) JDBC ドライバ

HiRDB を使用するには、HiRDB のインストールディレクトリに含まれる JDBC ドライバ pdjdbc4.jar (Type4 JDBC ドライバ) が必要です。pdjdbc4.jar のパスを環境変数 CLASSPATH に追加するか、ODIP 各製品の extlib フォルダに pdjdbc4.jar をコピーしてください。

#### (2) コマンド実行

pdload コマンドを使用してデータロードでデータを出力する場合、ODIP の実行ユーザに pdload を実行するための適切な権限を設定してください。pdload を実行するための

設定については、HiRDB のマニュアルを参照してください。

### (3) RD エリアの指定

ODIP が CREATE するテーブルおよびインデックスの RD エリアを指定するには、データセットごとに指定できる「テーブルスペース」または「インデックススペース」に RD エリア名を定義します。「テーブルスペース」に指定された RD エリアは CREATE TABLE 文で、「インデックススペース」に指定された RD エリアは CREATE INDEX 文でそれぞれ使用されます。

### (4) RD エリアのページサイズ

トランスフォーマリポジトリのデータソースに HiRDB を指定する場合、ページサイズが 8KB 以上の RD エリアが必要です。

### (5) 制限事項

ODIP 製品で HiRDB を使用する場合、次の制限があります。

- HiRDB が提供するローダである pdload コマンドは、HiRDB サーバ上からのみ実行可能です。そのため、ODIP と異なるホストで稼働する HiRDB に対してローダを使用した場合、エラーが出力されます。
- HiRDB に対する再帰クエリの処理はサポートしていません。再帰クエリを定義して実行した場合、エラーが出力されます。
- ODIP アドミニストレータの「入力データ」コンポーネントの「リレーション属性」に定義された TRIM/LTRIM/RTRIM/SUBSTR/PAD 関数は HiRDB によって提供される関数に依存するため、「文字数」ではなく「バイト数」で切り取り、桁埋めが行われます。
- ODIP トランスフォーマの実行オプションでスレッドモードまたは Web API を有効にする場合、-tempds オプションに HiRDB のデータソース情報を指定することは非推奨です。

## 3. IN 演算子の追加

条件式で IN 演算子を使用できるようになりました。左辺の値が IN で指定された右辺の値のリストのいずれかと一致するとき、TRUE と評価されます。入力抽出条件、一括削除管理単位の削除条件、出力前削除条件で使用した IN 演算子は SQL の WHERE で実行され、導出演算など、その他条件で使用した IN 演算子は ODIP 内部で演算が行われます。

### (1) 構文

[評価する値] IN [カテゴリ階層の出力カテゴリ]

または

[評価する値] IN ( 値 1, 値 2, 値 3, ... )

式	説明
[評価する値]	文字型、文字日付型、または数値型の属性、カテゴリ、リテラル、関数、式を指定します。
[カテゴリ階層の出力カテゴリ]	カテゴリ階層でマッピングされた出力分類属性のカテゴリを指定します。カテゴリ階層でマッピングされていない属性、カテゴリを指定すると登録時、実行時にエラーになります。
( 値 1, 値 2, 値 3,... )	文字型、文字日付型、または数値型の属性、カテゴリ、リテラル、関数、式のリストを指定します。

## (2) 定義例

業種コード		業種コード出力 - レベルのヘッダを押すと、マッピングを編集できます。		
入力カテゴリ	レベル1	レベル2	レベル3	
01 - 農業	01 - 農業		500 - 一次産業	
02 - 林業	02 - 林業		500 - 一次産業	
03 - 漁業	03 - 漁業	100 - 水産業	500 - 一次産業	
04 - 養殖	04 - 養殖	100 - 水産業	500 - 一次産業	

カテゴリ階層に上図の定義があるとき、次の 4 行の条件式は同じ結果になります。

```
[業種コード] IN [業種コード出力.水産業]
[業種コード] IN ([業種コード.漁業], [業種コード.養殖])
[業種コード] IN ("03", "04")
[業種コード] = "03" OR [業種コード] = "04"
```

## 4. GUI の改定

主に ODIP アドミニストレータの GUI において、定義要素の表示及び編集画面における標準的なアイコン配置を次のように変更しました。

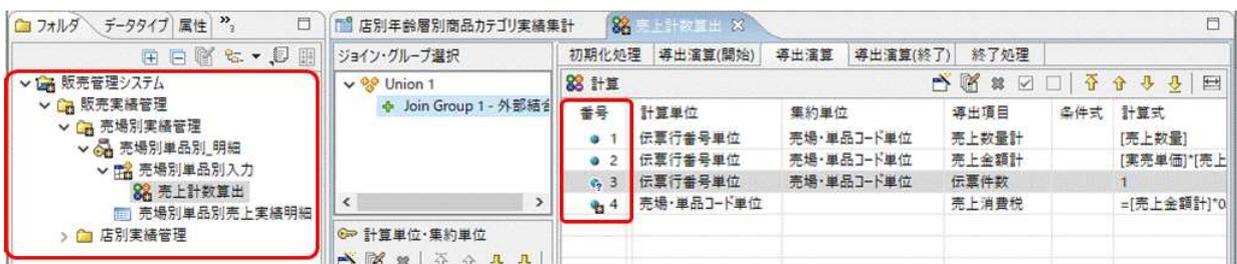
### (1) データタイプ、属性、データセット各タブの表示切替機能

各タブに、「表示切替」のオプション (アイコン) を追加しました。「表示切替」アイコンを使用することで、「名称だけの表示」と「名称及び定義内容の表形式での表示」を切り替えることができます。GUI 起動時の初期表示は、v4.2 のときと同じになります。

- ① データタイプタブでは、次の表示のどちらかを選択できます。
- (a) データタイプ名だけを表示
  - (b) データタイプ名、カラムタイプ、カラムの長さ/有効桁数、小数桁数、日付/数値書式を表形式で表示（v4.2 以前と同じ。ただし、「参照」列は対応する値の表示がなかったため削除）。
- ② 属性タブでは、次の表示のどちらかを選択できます。
- (a) 属性名、エイリアス名、カテゴリをツリー形式で表示（v4.2 以前と同じ）
  - (b) 属性名、デフォルトカラム名、データタイプ名、用途、分類を表形式で表示し、エイリアス名、カテゴリ名をツリー形式で表示
- ③ データセットタブでは、次の表示のどちらかを選択できます。v4.2 以前の表示切替（1. データセット名とテーブル/ファイル名、2. データセット名、3. テーブル/ファイル名、4. タイプとデータセット名）機能はなくなりました。
- (a) データセット名だけを表示（v4.2 以前と同じ）
  - (b) データセット名、テーブル/ファイル名、スキーマ名、ユーザータイプを表形式で表示
- (2) 定義要素の変更表示

コンポーネントのエディタ上、定義要素のアイコンに、追加 (?)、変更 (■) の表記を追加しました。プロジェクトを開いた後（前回のプロジェクト保存後）またはプロジェクトをリポジトリからチェックアウトした後に行った追加、更新、削除を表示します。削除の場合、削除した要素の親要素に変更アイコンを表示します。また、フォルダタブのコンポーネントには子要素に変更があれば変更のアイコンを表示するようになりました。下図に追加・変更表示の例を示します。図の赤枠内に、フォルダタブ及び導出演算の追加、変更行のアイコンを表示しています。プロジェクトのファイルへの保存またはリポジトリへのコミットによって、追加、変更の表示はリセットされます。

#### 追加・変更表示の例

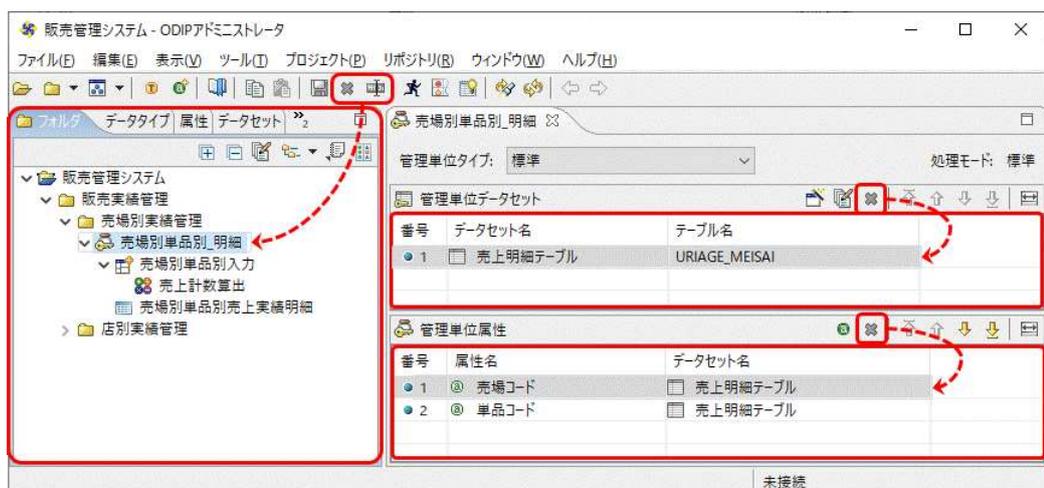


この変更に合わせて、コンポーネントのエディタに共通して次の変更を行いました。

- (a) 表形式のビューアで、v4.2 以前から左端に「番号」列のあるものは、番号列に共通のアイコン (●) を表示します。導出演算、コード変換の一部には既に番号列にアイコン表示がありましたが、どのエディタでも番号列にはアイコンを表示するようになります。
- (b) 表形式のビューアで、上下移動アイコンによって定義順を変更できる次の定義には、ビューアの左端に「番号」列を追加し、共通のアイコンを表示するようになりました。
- ・入力データの外部変数属性、リレーション、リレーション属性
  - ・ユーザ関数の入力属性
  - ・休日テーブルの休日規則、特定の休日/営業日
  - ・時系列演算のサイクル別時系列保有期間

### (3) 「名前の変更」及び「削除」機能の配置変更

メインメニュー及びツールバーの「名前の変更」及び「削除」オプションは、画面左のフォルダタブ、データタイプタブ、属性タブ、データセットタブに対してだけ有効に機能し、コンポーネントのエディタには、ビューアごとに必要なオプションを個別に配置するようにしました。「削除」オプションは、各ビューアにアイコンを追加しています。下図にフォルダタブ及び管理単位定義エディタの表示例を示します。図では、メニューバーの削除及び名前変更アイコンは、フォルダタブで選択した要素に対して有効になり、右側の管理単位定義エディタでは、各ビューアに対応する削除アイコンが、それぞれビューア上の要素に対して有効であることを示しています。



### (4) 定義ウィンドウの改定

- ① ODIP アドミニストレータ・プロジェクトメニューの「休日テーブル」、「期管理」、「データソース情報」、「ユーザビュータイプ」、「時系列日付」、「ユーザ関数」
- (a) 各ウィンドウのメニューバー及びツールバーの配置を変更しました。「新規」オプションは編集メニューからファイルメニューに移動しました。ファイルメニューにはどの定義ウィンドウにも「プロジェクトの保存」オプションを追加しました。定義ウィンドウでの編集中に[Ctrl+S]キーを押すことで「プロジェクトの保存」を行うことができます。
  - (b) 休日テーブル、ユーザ関数のウィンドウは、左側に定義の一覧を、右側に各定義の詳細を表示しています。これらのウィンドウでは、編集メニューの「削除」オプションは左側の定義の一覧ビューアにだけ有効になります。右側の詳細編集画面では、ビューアごとに削除アイコンを配置しています。
  - (c) 休日テーブル定義ウィンドウには、「名前の変更」オプションがなくなり、「新規」及び「プロパティの編集」ダイアログで休日テーブルの名称の登録及び変更を行うようになりました。
  - (d) ユーザ関数定義ウィンドウのユーザ関数名の一覧から「番号」列を削除し、上下移動の機能をなくしました。プロジェクトメニューの他のウィンドウと表示形式と操作を統一したものです。代わりにビューアのヘッダをクリックすることで、「ソート」及び「フィルタ」を使用することができます。ユーザ関数の一覧は最初に以前のバージョン番号順に表示され、以降は登録順の表示になります。「ソート」を指定することで名前順に表示することができます。
  - (e) ユーザ関数定義ウィンドウには、コンポーネントのエディタと同様に、定義要素の追加 ( ? )、変更 ( ■ ) の表記を行うようになりました。
- ② ODIP アドミニストレータ及び ODIP プロセスマネージャのツールメニュー上の「データソース情報」
- データソース情報定義ウィンドウでは、データソース名の列にアイコン (  ) を表示し、追加 ( ? )、変更 ( ■ ) の表記を行うようになりました。ODIP アドミニストレータではデフォルトして使用するデータソースのアイコンには、チェックマーク (  ) が付加されます。ODIP の標準的なコピー (Ctrl+Shift+C) 及び貼付け (Ctrl+Shit+V) オプションをメニューバーに追加しました。
- ③ ODIP プロセスマネージャ・ツールメニューの「トランスフォーマ・リポジトリ情報」
- メニューバーの編集メニューでは、「列幅の自動調整」をなくし、「検索」を追加しました。「列幅自動調整」オプションはビューアに付随する機能としてビューアの上端左端にアイコンを表示します。
- ④ ODIP オペレーションマネージャ・ツールメニューの「データソース情報」

- ・データソース名の列にアイコン (●) の表示を追加しました。トランスフォーマリポジトリに未保存の変更がある行には、アイコンに変更 (■) の表記を行います。また、未保存の変更の列値をイタリックで表示することで変更箇所が分かるようにしています。
- ・ファイル (CSV, COBOL, 固定長) のデータソース編集ダイアログで「テスト」を行ったときに、パスの存在に加えてエンコーディングの種類の有効チェックを行うようになりました。ODIP アドミニストレータでサーバモードでテストするときの動作と合わせました。

## (5) リスト表示の改定

ODIP アドミニストレータ及び ODIP プロセスマネージャのツールメニューの「リスト表示」オプションについて、次の表示、動作の改定を行いました。

### ① 一括変更、削除機能の改定

(a) ODIP アドミニストレータのリスト表示では一括変換機能を拡張し、ODIP プロセスマネージャのリスト表示では一括変換及び削除機能を無効にしました。

(b) ODIP アドミニストレータの一括変換機能拡張

「管理単位の状態変更」アイコン (🔑) を、「プロパティ編集」アイコン (📝) に変更しました。これに合わせて「エディタに移動」アイコンのイメージを (⇒) に変更しました。プロパティ編集アイコンは、管理単位、データセット、ユーザビューのいずれかをタイプの際に有効になり、複数の行を選択して次の項目を一括変更することができます。

- ・管理単位の場合は、「状態」を一括変更することができます。
- ・データセットの場合は、「スキーマ名」、「テーブルスペース」、「インデックススペース」を一括変更することができます。
- ・ユーザビューの場合は、「出力データセットタイプ」、「サイクル」、「ロードタイプ」、「ユーザビュータイプ」、「コミットポイント」を一括変更することができます。コミットポイントは追加・更新・削除管理単位の出力ユーザビューの場合だけ変更でき、「指定行数」を選択した場合は行数を併せて指定します。

### ② 属性の表示列変更

(a) 属性の一覧において、v4.2 以前は「エイリアス」列には、その行がある属性のエイリアスである場合に、エイリアスの元となる属性 (元属性) を表示していました。改定によって、「エイリアス」列にエイリアスであるか否かを Y (エイリアス) または N (エイリアスでない) を表示し、「元属性」列を追加して元属性の名前を表示するようになりました。

- (b) 分類属性の場合に配下のカテゴリ数を表示する「カテゴリ数」を追加しました。また、その属性が入力データセット及び出力データセットで参照される数をそれぞれ表示する「入力データセット参照数」、「出力データセット参照数」の列を追加しました。

### ③ コンポーネントの表示列追加、変更

- (a) 管理単位の表示列に処理モード、管理単位タイプを追加しました。
- (b) 入力データ、抽出条件、削除条件、導出演算、ユーザビューには、コンポーネント名の後に例えば“出力条件”、“入力時導出演算”のようにコンポーネントのタイプ列の表示を追加し、管理単位名の後に処理モード、管理単位タイプ列を追加しました。また、初期表示時の列の並びを、コンポーネント名、コンポーネントに固有の情報、上位のコンポーネント、管理単位、フォルダの順にしました。
- (c) 入力データの間接データセットに関する列（サイクル、クロス集計/明細、中間データセットタイプ）を削除しました。

### ④ 管理単位入出力データセットの変更

同じ管理単位に複数のユーザビューを定義し、例えば、明細ユーザビューは日次、クロス集計ユーザビューは月次のように異なるサイクルであるとき、日次、月次それぞれのプロセスに、同じサイクルの出力データセットだけを表示するようにしました。v4.2までは、出力データセットを各プロセスに重複して表示していました。

## (6) 全参照の改定

- ① ツールメニューの「全参照」の機能を拡張し、複数の定義を選択して参照先が表示されるように変更しました。この変更によって、選択中の定義の名称は、ヘッダ部に表示されなくなり、ツリー上のルートノードとして表示されます。
- ② ユーザビューの出力データセットの列を参照する定義を、参照先の表示対象に含むようになりました。これによって、複数の管理単位による処理の連鎖をツリー上で見ることができるようになっています。参照がループする定義については、ツリー上に一度現れた定義の要素への参照の直前まで表示の対象になります。

## 5. その他の修正

### (1) ODIP アドミニストレータの改定

#### ① 抽出条件・削除条件の条件式の改定

- (a) 一括削除管理単位の削除条件、および出力前削除条件で、文字列の結合 (||) を使

用することができるようになりました。

- (b) 一括削除管理単位の削除条件で、四則演算を使用することができるようになりました。
  - (c) 出力前削除条件で使用できない関数を定義すると実行時にエラーになっていましたが、登録時にエラーになるようになりました。
  - (d) クロス集計ユーザビューの出力抽出条件で、初期化処理で求めた属性または外部変数属性を使用すると処理が異常終了する問題を修正しました。
- ② ログメッセージの改定
- (a) ジョブログに一時テーブルの削除メッセージを追加しました。メッセージは“[一時テーブル名]を削除しました。DROP 文実行時間[ミリ秒 ms]”のように出力されます。
  - (b) ゼロ除算など、計算式・計算式でエラーが発生した場合のメッセージを変更し、計算式・条件式を含むメッセージを出力するように修正しました。
  - (c) ファイル結合で一時テーブルのコピー元テーブル/ファイルが存在しない場合のメッセージが“複写元のファイル”と出力されていましたが、“入力ファイル”と出力されるように変更しました。
- ③ 入力データ定義で異なる Join Group 間のリレーションを定義するとき、上位 Join Group 側（例えば Join Group1 と Join Group1.1 の Join Group1 側）のリレーション属性でも式/関数を使用できるようになりました。ただし、上位 Join Group 側の式/関数で利用できる属性は1つになり、複数の属性を使用することはできません。
- ④ 管理単位の処理モードが「一括削除」の場合、再帰クエリを定義できないように修正しました。
- ⑤ プリファレンスの表示ページの「追加、変更のある要素に">"（変更）、"\*>"（追加）マークを付ける」オプションが有効であるときに、データセットのカラム定義を変更してもデータセットに変更マークが表示されない問題を修正しました。
- ⑦ データタイプタブ、属性タブ、データセットタブのフィルタオプション () のツールチップテキストを「Filter」から「フィルタによる絞り込み」に変更しました。また、フィルタが有効になっているときのアイコンの表示 () 変更しています。
- ⑧ ダイアログの下方に配置されているキャンセルボタンの表記が「Cancel」になっているものは、「キャンセル」を表記するようになりました。
- ⑨ フォルダタブに全展開のアイコン () を追加しました。選択したフォルダの下の要素を全て展開して表示します。なお、以前のバージョンではフォルダを選択してダブルクリックすると、全展開と同じ動作を行っていましたが、アイコンの追加に伴ってダブ

ルクリック時には一つ下のレベルを展開または圧縮するようになりました。

- ⑩ 定義の検査において、テーブル/ファイル名に次の(a)～(c)の複数の問題があるときに、以前のバージョンでは、最初に検出した問題だけを問題点に表示していましたが、検出した問題を全て表示するようになりました。(a)～(c)の全部に該当する場合、問題点には3行のメッセージを表示します。
- (a) 名前の長さが最大値を超えている。  
 (b) 全角文字と半角文字が混在する。  
 (c) 使用できない文字が含まれる。
- ⑪ 属性タブで属性情報を編集するダイアログで、分類属性のチェックを解除し、データタイプを数値型に変更して OK ボタンを押すと、「分類属性のデータタイプは c か v でなければなりません」とのメッセージが表示されて更新できない問題を修正しました。
- ⑫ 設定ファイル (odip.ini) のプロパティ名の綴りの誤りを次表のとおり修正しました。誤ったプロパティ名は本バージョンから無効になります。

誤	正
user.extention	user.extension

- ⑬ v4.2で使用停止になったクロス集計併合入力定義について、エディタによる表示及び定義の検査についても機能を停止しました。
- ⑭ データ複写管理単位に複数の複写を定義したときに、処理の実行順序が画面上の定義順序と一致しない場合がありますが、必ず画面上の定義順序に従って実行するように修正しました。
- ⑮ ツールメニューの「すべての<Interim>定義を作成」及び「すべての<Interim>定義を削除」オプションを廃止しました。v4.2 リリースにおける「クロス集計・グループ集計の Interim データセット廃止」に続いて Interim 定義に関する機能を縮小しました。時系列演算を伴う管理単位については、フォルダタブのコンテキストメニューから「<Interim>定義の作成」オプションを選択することでこれまでどおり Interim 定義の更新を行うことができます。
- (2) ODIP オペレーションマネージャの改定
- ① 設定ファイル (odip.ini) のプロパティ名の綴りの誤りを次表のとおり修正しました。誤ったプロパティ名は本バージョンから無効になります。

誤	正
user.extention	user.extension

- ② ダイアログの下方に配置されているキャンセルボタンの表記が「Cancel」になっているものは、「キャンセル」と表記するように変更しました。
- (3) ODIP リポジトリマネージャの改定
- ① 更新履歴の変更内容の表示において、実際には定義内容の変更がないにも関わらず、次の(a)、(b)いずれかに該当する場合に該当行が表示される問題を修正しました。
    - (a) 導出演算（開始）、導出演算（終了）、出力前導出演算の定義中、初期値に属性またはカテゴリを指定している場合
    - (b) ユーザビューの列定義中、(a)に該当する導出演算の導出項目を元属性に指定している場合
  - ② ダイアログの下方に配置されているキャンセルボタンの表記が「Cancel」になっているものは、「キャンセル」を表記するようになりました。
- (4) ODIP プロセスマネージャの改定
- ① ツールメニューの「すべての<Interim>定義を削除」及び「すべての<Interim>定義を作成」オプションを廃止しました。v4.2 リリースにおける”クロス集計・グループ集計の Interim データセット廃止”に続いて<Interim>定義に関する機能を縮小しました。時系列演算を伴う管理単位では、トランスフォーマリポジトリの作成時に必要な Interim 定義の作成・更新を行います。
  - ② ツールメニューの「テーブル・スキーマのチェック」オプションでは、データソース定義において「パスワードを保存する」にチェックをオンにしたデータソースのテーブルであっても、毎回パスワードの入力が必要になっていました。パスワードを保存したデータソースの場合はパスワードの入力は不要になりました。
  - ③ ダイアログの下方に配置されているキャンセルボタンの表記が「Cancel」になっているものは、「キャンセル」を表記するようになりました。
- (5) ODIP トランスフォーマの改定
- ① ログメッセージの改定
    - (a) ジョブログに一時テーブルの削除メッセージを追加しました。メッセージは“[一時テーブル名]を削除しました。DROP 文実行時間[ミリ秒 ms]”のように出力されます。
    - (b) ゼロ除算など、計算式・計算式でエラーが発生した場合のメッセージを変更し、計算式・条件式を含むメッセージを出力するように修正しました。

- (c) ファイル結合で一時テーブルのコピー元テーブル/ファイルが存在しない場合のメッセージが“複写元のファイル”と出力されていましたが、“入力ファイル”と出力されるように変更しました。
- ② -tempds で一時テーブルを指定してファイル結合を行う処理で、ソート項目の数が DBMS のインデックスに指定できる最大列数を超過して定義されていると、一時テーブルに対する CREATE INDEX でエラーが発生する問題を修正しました。ソート項目の数が DBMS の最大列数を超過するとき、最大列数までの列で複合インデックスを作成し、最大列数を超過する列はインデックスには使用されません。
- ③ PostgreSQL のデータベースに作成したトランスフォーマリポジトリを、repcomp コマンドの-patch オプションを使用して差分ファイルを作成すると、差分ファイル中 CLOB 型の列値に”clob1:”などのラベルが付加され、データが不正になる問題を修正しました。
- ④ CSV ファイルを入力するジョブのオプション追加

設定ファイル (odip.ini) に次のオプションを追加しました。このオプションを有効にすることで、v4.1 以前のバージョンの次の動作を再現します。このオプションは、startjob コマンドの-config のパラメタ及び ODIP アドミニストレータの「実行」時のパラメタに指定することができます。

- (a) 囲み文字で囲まれていない文字列の最初と最後の半角スペースを無視します。(例：「AAA, BBB ,CCC」の 2 列目の値は、オプションが有効の場合は「BBB」、オプションが無効の場合は「 BBB 」)
- (b) 囲み文字で囲まれている文字列の前後にある半角スペースを無視します。(例：「"AAA", "BBB" ,"CCC"」の 2 列目の値は、オプションが有効の場合は「BBB」、オプションが無効の場合は「 "BBB" 」)

オプション	説明
job.csv.trim.space = [true false]	CSV ファイルを入力データソースとする処理で、囲み文字で囲まれていない文字列の前後の半角スペースを削除するか否かを指定します。true を指定すると、囲み文字で囲まれていない文字列は前後のスペースを削除します。

## B. バージョンアップによる影響

### 1. 定義内容・検査に関する影響

プリファレンスの定義の検査において、テーブルファイル名の(a)名前の長さが最大値を超えている、(b)全角文字と半角文字が混在する、(c)使用できない文字が含まれるのオプションを有効に設定し、あるデータセットのテーブル/ファイル名が(a)～(c)の複数の制約に違反している場合、(a)～(c)それぞれに対応する行が問題点タブに表示されます。4.2以前のバージョンでは(a)～(c)のうち最初に検出された一行だけが表示されていました。

### 2. 処理実行結果に関する影響

既存の処理への影響はありません。

以 上